

金沢大学名誉教授
柴田正良

道徳的行為者のロボットの構築による
＜道徳の起源と未来＞に関する学際的探究」（基盤研究(A) 19H00524)

2023年度第3回科研費研究会
於:JAIST 金沢駅前オフィス

2024年2月10日

以下の内容は、当日の参加者の皆さんとの議論によって、当日の発表に加筆修正を加えたものである。当日の参加者の皆さんに、改めて感謝申しあげたい。

章立て：

1. 物理的、というより生物的存在者にいかにして価値描写が生まれたのか？
2. 宗教
3. 美
4. 道徳
 - (1)自由至上主義の3つの骨格
 - (2)多様な存在者たち
5. マインド・コントロールと、教育による刷り込み
6. 価値描写の継承と不断の選択・更新

価値記述相互の間に本質的な優劣関係などは存在しない：

どの価値描写も、それ自体では、つまり描写の内在的な性質によっては優劣がつかない。だから、ある価値記述に従えば「崇高な行為」も、別の価値記述の下では「愚劣な蛮行」でありうる。

目を覚ませ！ すべては「価値幻想」なのだ。

1. 物理的、というより生物的存在者にいかにして価値描写が生まれたのか？

物理描写の中には、価値を表す性質は登場しない。端的に言えば、物理世界には価値は存在しないからだ。物理世界を形成する法則や性質や出来事は、それ自体として見れば、美しくも醜くもないし、公平でも不公平でもない。また、神の降臨も悪魔の誘惑もない。ある時点での物理的状态／出来事は、物理的・因果的法則に従って、次の時点における物理的状态／出来事を生じさせる。その過程で、それ自体として「美的である」とか「道徳的である」とか「宗教的である」といった性質を、物理的に生み出すことは

ないだろう。古い言い方を借りれば、ただ「粒子の離合集散が真空のなかで繰り返し続く」だけである。だから、どうしたって価値が物理的世界に生ずるはずはないのだ。

しかし、われわれは「美しい」朝の光に心なごませ、昨日の自分の小さな「不正」に心おののかせ、亡くなった幼子の「魂の救済」を願わずにはいられない。どうしてこうなるのか？ 物理描写のどこにも、光の「美しさ」や、自分の「不正」や、子の「魂の救済」について、何も記されていないのに。

本稿は、人間のみならず、(たぶん)意識ある生物一般にとって価値記述(ふつうの言い回しでは価値的性質)がいかにして生じたか(現れたか)、を検証可能な科学的仮説として述べるのが目的なのではない。それはそもそも私の手に余る難事業なので、以下で述べるのは、せいぜいのところ、「価値生成」(価値描写出現)のありそうなストーリーの一つにすぎない。

生物個体は、進化の初期の段階から、生存のために都合のよい事物や環境に引き寄せられ、都合の悪い事物や環境を避けるような行動傾向を獲得してきたに違いない。なぜと言って、進化の王道(進化圧)からすれば、そのような行動傾向を持った個体こそが自らの生存の確率を高め、子孫を残す機会を増やすからである。緩い意味で生存に都合のよいものを選ぶ傾向性を、その個体の「愛好」と呼ぼう。同様に、逆の傾向性を「嫌悪」と呼ぼう。このような傾向性の基盤は、ある種の化学的な性質が別の特定の化学的な性質と引き合う、あるいは逆に反発し合う、といったレベルの現象に求められるのかもしれない(もちろん、それも物理的な因果過程が出現させているが)。しかし、そうした考察も、その筋の研究者に委ねよう。重要なのは、生物が進化の過程で「愛好」と「嫌悪」といった傾向性を強化し、それが価値生成の基盤になったという点である。

生物個体の視点から見てみよう。生物が生きて子孫を残す上で、餌や住処や繁殖相手は「愛好」の対象として知覚風景の中でも際立って現れるであろう。それらは言わば、地の上の明瞭な図として見え、聞こえるかもしれない。逆に、捕食者や身に危険をもたらす厳しい環境や繁殖の競争相手も、知覚風景の中で、しかしこの場合は「嫌悪」の対象として際立つであろう。彼らにとって、このような「メリハリ」の効いた知覚風景がまず一義的であり、彼らが、実験室で初めて人間が経験するような「純粋な」知覚を経験することはないだろう。彼らの知覚風景は、生まれたときから彼らの好悪の態度によってすでに色分けされ、分節化されている。逆に言えば、もしそのような態度によって<好悪>を染みこませた知覚世界を持てなかったならば、その生物個体は生き延びることができなかったであろう。想像するも哀れな話だが、近眼の驚や、鼻の効かないハイエナや、耳の聞こえないコウモリなどは、感覚器官の劣化・損傷によって知覚世界の「凹凸」(好悪の対象)が消え去るという不運に見舞われている。彼らの死は近い。

彼らにとっての<好悪>は、彼らにとっての<価値>である。それによって、彼らは知覚対象に対する態度を決定する。彼らにとって、知覚世界はこの意味で価値世界である。両者は、最初から分かちがたく融合しているのだ。しかし、それは、価値的性質が実在的性質だということを意味しない。ここで、「実在的性質」とは、この「重ね描き多元論」シリーズの前提である物理主義から言えば、以下のようになる。

実在的性質(性質の実在性)：ある性質が実在的であるのは、それが物理的性質に還元されるか、もしくは、物理的性質にローカルにスーパーヴィーンする場合であり、その場合に限られる。

この文脈で私は、「特定の知覚者(主観)との関係でのみ出現する実在的性質」の可能性、などといった形而上学的迷路に入り込むつもりはない。したがってまた、傾向性

の実在性を関係的性質として主張する立場にも与しない。それは、可能的関係の際限のなさゆえに、際限のない数の性質を実在的と称せざるをえないからである。つまり素直に、＜価値的性質＞は反実在論的（非実在的）だと主張するのが私の立場である。例えば、モズの視界に現れた鷹の＜邪悪さ＞という価値的性質は客観的な物理世界のどこにも存在しない（もちろん、鷹の物理的身体の中にも存在しない）。しかし、もちろん、恐怖におののくモズにとっては紛うことなき＜邪悪さ＞が現在しているだろう。では、どこにそれは存在しているのか？ 以前に論じたように、それは脳腫瘍患者にとっての＜虎の幻覚＞と同様である。この場合は、健康なモズの脳や神経系や知覚器官が、＜邪悪さ＞という価値的性質を仮象として生み出しているにすぎない。夢の場合との比較が分かりやすいだろう。夢を見ている人の「夢見の経験」はその人の脳活動にスーパーヴァイーンしているが故に実在するが、「夢見られた事物や出来事」は現実世界のどこにも存在していないのと同様である。

さて、ここで、記述の重ね合わせの具体例に戻ろう。まず、基盤となる物理描写は、物理的なモズや鷹を物理空間の中に描く。ここには、＜邪悪さ＞などという物理記述は存在しない。次いで、モズが持つだろう知覚描写を物理描写に重ねてみよう。モズの物理的な身体記述に自分自身についての知覚記述が重ねられ、そこそこに離れた鷹についての物理記述には、鷹についての知覚記述が重ねられる。そして更に、鷹についての知覚記述に、「邪悪である」という価値記述が重ねられるだろう。この価値記述の出所は、何度も繰り返して恐縮だが、このモズの認知機能の働き以外にはない。例えば、この鷹の後ろに付いて飛んでいる子どもの鷹がもつ知覚描写には、親の鷹を描いた知覚描写に、「邪悪である」などという価値描写は決して重ねられず、むしろ「頼もしい」という価値記述が重ねられているだろう。また、場合によっては、鷹を危険な敵として捉える認知機能が損壊している隣のモズにとっても、それが持つ知覚描写に描かれた例の鷹には、「邪悪である」という価値記述は重ねられていないかもしれない（そのモズはやがて死ぬだろう）。言うまでもなく、もし価値的性質が実在するなら、物理的個体としてのその鷹において、＜邪悪である＞と＜邪悪でない＞という2つの矛盾した性質が同時に実現することになるが、それは不可能である。そして、すでにこの「重ね描き多元論」シリーズの議論で述べたように、生物個体もつ各描写は独我論的である。つまり、各記述において存在するとされるどの事物や性質も、その生物個体だけが持つ記述であり、ただ、それらが物理描写に対応物をもつ場合には、他の生物個体も同様の知覚記述や価値記述をもつ確率が高くなる、というにすぎない。もしそれらの記述が物理記述に対応していない事物や性質を含んでいるなら、それらは「幻覚」である（後の第2章「宗教」では、物理記述に対応物を持たないにもかかわらず、同じ価値記述を多くの人間個体が持つ、という驚くべき「集団幻覚」の事例を見るであろう）。

＜良薬、口に苦し＞：

ここで、極めてありそうな一つの誤解をあらかじめ除いておこう（物わがりの良い読者は、ここを読み飛ばしても本稿の理解に差し支えはない）。それは、価値的性質の因果的効力に関するものであり、こう主張する。「鷹の＜邪悪さ＞がモズの生死を分ける行動を促すなら、＜邪悪さ＞はモズの逃走という因果的結果を世界にもたらしたのだから、それは実在的である。このように、価値的性質は因果的効力を持ちうるのだから実在性を持っている」。

これは一般に、下降因果（downward causations）、もしくは高階因果を主張したくなる場合に共通した議論であって、それは、集団内の規範や宗教的信念などの場合を含め、

典型的には心的因果（mental causations）を引き合いに出して「因果的効力ゆえに実在性あり」と主張する。しかし、物理主義においては、物理因果に還元できない下降因果や高階因果などというものは存在しない。因果的な仕事はすべて物理レベルで果たされるだけであって、それ以外と思われる因果過程はすべて随件事象（エピフェノメナ）である。

この点で、心的因果に関する長くて実り乏しい論争の教訓は、脳活動にスーパーヴィーンしている限りでの心的状態は（信念であれ、欲求であれ、意識であれ、クオリアであれ）心的性質として実在していても、いかなる因果的な仕事もなしていない、ということを示した点にある。これを一般化して言えば、「因果的効力（causal efficacy）」なる概念はどのレベルの出来事においてもミスリーディングで、虚妄な概念だ、ということである。つまり、存在もしない「因果的効力」は性質の実在性の基準たりえない。したがって、価値的性質は、「因果的効力を持たないが故に実在しない」のではなく、先の定義からしてそもそも実在していないのだ。

それでは、下降因果や高階因果を認めない物理主義の下では、われわれの普通の因果的ストーリーは語れないのだろうか？ そんなことは全くない。すでに他の機会に述べたように、それらは、物理的因果の大ざっぱで、不正確ではあるが、迅速な、日常的には急所を捉えた因果的語りとして問題なく通用する。むしろ物理主義の下でのエピフェノメナリズムがそれを可能にする。その意味で、人間の行為者は自由に意図的行為を行っているし、動物個体でさえ、その認知機能の複雑さに応じてではあるが、「自由な行動」を実現しているだろう。

以上の誤解の根源は、ほぼ全ての場面で物理的因果の堅固さや脱神秘性に依存しながらも、それが持つ決定性や必然性には都合良く目をつぶり、お気楽に下降因果や因果的効力を語るという、哲学する際の「不徹底さ」にある。もし物理主義を採らないなら話は別だが、そうではなく真面目にそれを前提するなら、その一見した「不都合さ」も額面通りに受け入れるべきであろう。相容れない主張の「良いとこ取り」は、有益なものを何も生まない。他方、物理主義を不必要に恐れる必要もない。というのも、物理主義が含意する全面的で普遍的な因果決定性は、科学者やロボット工学者の「無害で常識的な因果的語り」を、エピフェノメナリズムとして容認しているからである。

さて、誤解への対処にいささか手間をかけすぎたかもしれない。本来の状況に戻ろう。

モズと鷹の重ね描きの上層から物理描写の有り様に到達できないのだろうか？ あくまで外部観察者から見ての話だが、生物個体にとって、他個体との知覚記述や価値記述（とくにここでは、モズどうし、鷹どうし、モズと鷹どうし）の共有は、それらの記述が同一の物理記述に対応しているという予想を高めるだろう。というのも、究極のところは、物理記述に対応した事物や性質のみが生物個体の生存と繁殖を支えるからである。しかし、多くの生物個体間での記述の共有は、物理記述との対応を必ず保証するわけではないし、そもそも、われわれは人間以外の生物が持つ知覚記述も価値記述も実際には知ることができない（独我論的な不可知性に加えて、より緩いレベルでも生物種間には言語コミュニケーションの壁が立ちはだかっている）。したがって、ここには一つ注意すべきことがある。それは、生物個体、とくに動物個体に対する、われわれの素朴心理学的内容の過剰な読み込みである。

その一例を挙げよう。よくテレビなどで放映されるシーンだが、生まれて間もないヒナたちのために親鳥が一日中せっせと餌を巣に運ぶ。親鳥は可愛いヒナの姿を見て、いてもたってもいられないように見える。これは普通、親子の微笑ましい光景だと紹介されるが、実態は少し違うようだ。親鳥は、実は、子の姿を「わが子」として正確に認知

しているわけではない、というのが鳥類学者たちの見立てのようである。要するに、例えばモズの親鳥が反応しているのは、餌を求めて開かれた「赤い口」であって、ヒナの姿ではない。その証拠に、自分のヒナとは姿の異なる他種のヒナ、例えばカッコウのヒナがそこに紛れ込んでいても、モズの親鳥は、分け隔てなくすべてのヒナに餌を与えようとする。「托卵」(種間托卵)として知られるそのずる賢い寄生行動も、立派な進化戦略であって、それを可能にしているものの一つは、餌を与える親鳥の「自他のヒナを明確には区別できない」というレベルの認知機能の発動である。したがって、このモズがもつ知覚描写においては、「自分のこれこれのヒナがいる」という個体認知レベルの記述は実は存在していない、と言うべきであろう。実際に、どのようなタイプの記述がこうした親鳥の知覚描写において妥当であるのかは、さらに今後の動物生態学や、動物行動学や 動物心理学などの知見を待つしかないであろうが・・・

もちろん、動物すべてを今の例でカバーするわけにはいかないが、それでも、銘記すべき2つの一般的な論点がここから読み取れるだろう。第一は、人間以外の生物種の場合に顕著だが、それらの個体に帰せられている知覚記述や価値記述には、われわれ人間の素朴心理学的な見方や概念の読み込みが強力に行われている、ということである。われわれは、かいがいい親の「餌やり」を、「ヒナへの愛情」と言いたがるが、親の給餌行動は、むしろ「赤く開いた口への本能的反応」である。個々のヒナへの愛情があろうがなかろうが、親は「開いた赤い口」めがけて餌を放り込む。カッコウは、モズの巣に自分の卵を産みつけるに際して、モズの卵を1つ巣から蹴落として卵の数を合わせるだけではない。通常はカッコウの卵の方がモズより早く孵化し、そのヒナもモズの卵やヒナを巣から蹴落として、餌を独り占めしようとする(カッコウ、恐るべし)。しかし、こうしたカッコウの親子ではあるが、「瞞してやろうという悪意」も、「出し抜いてやろうという敵意」もそれらには無縁である。これらの記述は、すべて素朴心理学的な解釈の投影にすぎない。

銘記すべきもう一つの論点は、生物個体の価値描写が素朴心理学的な解釈に決定的に依存するために、人間の報告者(つまり解釈者)の立場や態度によって、同じ知覚記述に異なった価値記述(どころか相反する価値記述)が重ねられる場合がある、ということである。つまり、これは、知覚記述の点で同じとされる2枚の知覚描写に、相異なる価値記述を持つ2枚の価値描写が重ねられる、という事態である。このことが端的に示しているのは、知覚描写に対する価値描写の独立性であり、生物個体においては進化上いかにこの2つの描写が分かちがたく結びついていようとも、両者は本質的に別物だという点である。このように、生物個体の経験を記述間の関係として理解することのメリットは、価値描写の反実在論があらわになってくるという点にある。ついでに言えば、この場面での知覚描写は、そこから解釈者の素朴心理学的な要素をできるだけ抜き取り、いわば脱色させてみれば、「ヒナ鳥」・「赤い口」・「黒くて大きな鳥」・「黒くて小さな鳥」などというものだろうか?(これらは、「形」・「数量」・「色」・「大きさ」などを通して本来の物理記述に、何とか対応させられそうに見える)。いずれにせよ、くどいようだが、「ヒナ鳥」に対応する物理記述には更に「愛らしさ」の物理記述が重ねられると思うかもしれないが、そんな物理記述は存在しない。また、「黒くて大きな鳥」に対応する物理記述にも、それらに重ねたいと思うかもしれない「邪悪さ」や「頼もしさ」の物理記述は存在しない。こうして見るなら、価値記述の反実在論のポイントがどこにあるのかが理解されるであろう。要するに、価値記述は、脳腫瘍患者が見る「虎の幻覚」と同様に、基本的には「幻覚」なのである。たとえそれが当の個体にとっていかに切実で、歓喜と幸福どころか、死や災厄をもたらすとしても・・・

2. 宗教

人類がなぜ、またいかにして宗教のような「幻想のシステム」に辿り着いたかの詳細は、この論考の手に余るし、それを論ずるのがここでの目的でもない。この極めて興味深いテーマには、文化人類学、進化人類学、歴史社会学、宗教学、宗教史学、言語学などをはじめ、認知科学や、神経心理学や、脳科学全般の総合的な探究が必要となるであろう。しかし、ここで私が論じたいことはそれではなく、むしろ、人類が「超越的なもの」への感受の感覚を研ぎすませた経緯と、宗教が持つ独特の説得力に対して、反実在論の観点から光を当てることである。

人類の文化の黎明期、狩猟時代にせよ農耕時代にせよ、人間の営みは多くの点で不運や不幸や不如意に見舞われたはずである。科学や技術の恩恵を蒙るはるか以前、自然の猛威をそのままに受けるしかない人類にとって、悲劇はもっぱら天変地異の脅威からやってくる。原始的な武器に頼るしかない狩りや、獰猛な獲物との命がけの闘いや、洪水、干ばつ、地震、落雷、大津波、猛吹雪、疾病、感染症などなど。潮の満ち引きや昼夜の交代や季節の移ろいなどに関してある程度の規則性を理解するようになったとしても、依然として、自然は人知を超えた圧倒的な何かであったであろう。要するに、自然の摂理に対峙するには人間の理性的な認知能力はあまりに未発達で、脆弱であった。そのような際に、人間が自然の不可解さに対処するための認知機能は、理性や推論ではなく、感情であったであろう。感情機能の詳細はまだまだ解明されるべき部分を多く残しているが、少なくとも、認知的行為者の化学的な身体状態・内受容的な身体感覚と、外界の特徴の大ざっぱで迅速な分類把握とを、素早い行動につなげる役割を担っていたであろう（そして、現在も部分的に担っているであろう）。この感情機能の働きこそが、人類に、「尋常ならざる何か」、「人知を超えた何か」の存在をほのめかしたのではないか。もちろん、人は今でも、暗い天空の星のまばゆさや、はるかな蒼穹の青の深さや、海上に昇る旭日の荘厳さや、眼下に広がる峡谷の巨大すぎる空間に、神秘的な何かを感じざるをえないであろう。

そこに何があるのかは誰にも分からない。ただ、それは人間のもつ力をはるかに超えた途方もない「何か」であるに違いない。それは気まぐれにも、時として人の心に慰安と幸福をもたらしてくれるが、大きな恐怖と絶望の暗闇を拡げ、癒やしようのない不安を掻き立てることもある。対比されるのは、人間の卑小さであり、弱さであり、どうしようもない有限性であり、限界であろう。その「何か」は、人間には見えない「何処か」から強力な力で、森羅万象はもちろん、人間の存在と運命を支配しているのかもしれない。そのような「知覚世界を超越した存在」、それこそが現象を超えた真の実在として人類に感受されるようになるのは、ある意味で当然の成り行きだったであろう。

こうした超越者の受容を可能にしたのは、人間のどのような感情機能だったのだろうか？ 「畏怖 (awe) の感情」というと、いかにもそれらしいが、現在の感情心理学では、必ずしもそのようなワイルドな機能を果たすものではないようである。たぶん、現代人における感情分類以前の、言わば太古の「原感情」のようなものが、人類進化の初期段階においては強力に働いたのであろう。その名残としてか、今でもわれわれは、ある独特な瞬間に名指しがたい神秘感に襲われることがある。しかし、このような「超越的なもの」の感受はあっても、それへの実際のアクセスなどはあろうはずがない。なぜなら、そもそも「そのようなもの」は自然界には、というか正確には、物理的には存在していないのだから。宗教の反実在論が教えるのは、感受の経験は脳活動へのスーパーヴィーニエンスゆえに実在している、その何かは幻覚だということである。たとえ、部族集団の多くがその存在を共有したとしても、幻覚に変わりはない。たまたま同じ病態の複数のアルツハイマー型認知症患者が「同じ服装の少女の幻覚」を共有したとして

も、その少女が物理的に存在し始めるわけではないのと同じである。もちろん、この反実在論は、各々の認知症患者がもつ経験の存在を否定しているわけではない。ただ、経験の実在性は「経験したと称されるもの」の実在性を含意しない、というだけのことである。複数人の幻覚が集団全員の幻覚となっても、事態はいささかも変わらない。すべての宗教の根幹にある「超越的な存在」、それは結局、原初の感情機能に煽られた幻覚にすぎないのだ。

この幻覚に集団としての人類が何を期待し、何を託そうとしたかは、今さらくなく述べる必要はなかろう。ただ、この「超越的な存在」がやがて人格的な装いをまとい、様々な時代と地域で様々な「神」となったことは心に留めておこう。要するに、どの宗教のどの神も、物理記述に対応しない以上、幻覚である。恐らく、物理記述に対応しているのは、信仰する者たち全員の脳と認知機能における何らかの「異常」である。しかし、「異常」も大多数の人間において同じように生ずるなら、「正常」だと見なされる。そして「正常な」人に見えるものならば、それは幻覚ではなく実在だ、と言われるだろう。「幻覚の集団化による実在化」、これこそが、人類に「神」を現出させるロジックの急所である。

さて、ここで、宗教の唾棄すべき別の側面に議論を向けよう。それは、われわれのもう一つの論点、宗教のもつ絶大とも言える「説得力」である。

妙な言い方だが、人類の歴史上これまで、「説明」の点で、哲学と科学が宗教に勝ったためしはない。全敗である。その意味は、哲学も科学もそれらが提供する「説明」には限界があるが、宗教が与える「説明」には限界がない、ということである。例えば、宇宙の起源や終末、自然界の不可思議な現象に関して、哲学も科学も自説や仮説をいくらでも展開できる。空間や時間の本性に関しても同様である。科学の与える説明は基本的に「原因による因果的説明」であるのに対して、哲学による説明は、現実世界に関する科学的説明を包括するばかりか、可能世界をも説明の対象にする。しかしそうした違いにもかかわらず、両者には共に、論理的整合性と最大限の合理性が破ることのできない絶対の規律として課されている。しかし、宗教による説明には何の規律も限界もない。「不合理ゆえにわれ信ず」という言葉が、端的にそれを表現しているであろう。

宗教による説明の独壇場は、実は自然界の神秘ではなく、人生の不運、悲劇、挫折、不合理などである。これらの出来事は、「いかにしてそれが生じたか」に関する説明、つまり物理的原因による科学的・因果的説明を拒むわけではないが、人々が欲しいのは実はそれではない。例えば、生まれて間もないわが子が突然の事故に巻き込まれ、看護の甲斐も虚しく亡くなってしまったとしよう。この子はそのあまりに短い生涯において、何の罪も犯さず、何の悪事も働いていない。それなのに、なぜ他ならぬこの子が事故で死なねばならなかったのか？ こんな風に死ぬなら、一体なぜ、何のためにこの世に生まれてきたのか？ この子の人生に一体どんな意味があったのか？ この不幸な出来事がなぜ生じたのかに関して、どれほど正確で詳しい因果的説明がなされようとも、それは、「なぜそもそもこの理不尽な出来事が（他の子ではなく）他ならぬわが子に生じねばならなかったのか？」という理由を与えるものではない。なぜならこの問いは、「なぜそもそも私はこの世に出現したのか？」とか、「なぜ私は私であって他の誰かではないのか？」といった問いと同様に、世界の根源的な偶然性に対して、その理由を問うものだからである。したがって、このような問いに対して、卵子と精子の結合についての生理学的・医学的説明が無力であるのは、当然であろう。「その卵子とその精子のその結合がなぜ他の誰かではなく私なのか？」という問いが繰り返されるだけだからである。このような問いは、世界のどんな事象・出来事にも、それがなぜ生じたのかを人に納得させる「十分な理由」があると前提している。しかし、そのような「理由」を、原因による科学的・因果的説明は当然ながら与えることができない。それは「原因による説明」

の限界を超えているからだ。世界の根源的な偶然性は、この宇宙の開闢以来の物理的出来事を、現在の地球上の「私」の出現まで正確に辿ったとしても、そのような因果連鎖では説明することができない。

ここで、宗教が登場する。宗教は、靈魂や、死後の世界や、神や、悪魔や、奇蹟や、恩寵や、天国や、地獄や、救いや、劫罰や、ありとあらゆるお話を持ち出して、どんな事象もどんな出来事も説明する。この説明は徹底的に融通無碍である。まったく同一の出来事を非難することもできれば、称賛することもできるし、相容れないどんな意味もそれに付与することができる。すべてを思うがままに説明できる万能の説明とは、つまるところ、何も説明していないということだ。はっきり言えば、宗教による説明は嘘八百だし、何の根拠もないデタラメである。宗教に関する反実在論からすれば、それは当然すぎる結果だ。宗教が持ち出す靈魂や、死後の世界や、神や、悪魔や、奇蹟や、恩寵や、天国や、地獄や、救いや、劫罰はすべて妄想か幻覚にすぎない。そのようなものどもは、物理描写に登場する物理記述に対応物を持たない。ただ物理描写に対応するのは、妄想や幻視や幻聴を経験している人の、多少とも異常な脳活動にすぎない。それは、敵対する宗教どうしが、同一の出来事に完全に矛盾する解釈と意味を与えている場合を考えてみればよく分かるであろう。この2つの宗教のどちらかが正しく、どちらかが間違っている、などということはない。どちらも真理とは無縁なのだから。

宗教の教祖、創始者、預言者などにはいかがわしい人物も多く存在するであろうが、世界史に名を刻むほどの人たちは、おおむね穏やかな人格者であったであろう、と私は勝手に想像している。ただ、彼らは恐らく皆、幻視や幻聴にとらわれやすい「異能者」、というか正確には、脳に何らかの疾患を抱えた「異常者」であったであろう。彼らは総じて、才気溢れるリーダーであるよりは、ドストエフスキーや太宰治などが描いたような弱々しい生活破綻者に近かったであろう。彼らが自ら「嘘」と知りつつ嘘を語ることはなかったであろうが、そもそも彼らの脳にあるのは妄想と幻覚である。

宗教が多くの人々に受け入れられ、「集団幻想」や「集団幻覚」のシステムとなったとき、事態は一変する。集団全体が幻覚、幻視、幻聴を共有し、ありもしない神秘的な物語を受け入れ、特別な存在（神／予言者）を崇拜するようになると、そこに途方もない権力が存在し始める。この宗教という「集団幻覚のシステム」に自らも操られ、集団全体を操る者は、容易に人々を死へと駆り立てることができるからだ。時代を下るほどに、宗教（神）の名において、あるいはそれを正当化の根拠として、いかに多くの戦争が行われ、いかに多くの都市や街が破壊され、いかに多くの人々が虐殺されたかについては、この論考より、世の歴史家や歴史学者が雄弁に語るであろう。21世紀の今も、世界のあちこちで行われている侵略戦争では、たとえ独裁者たちの私利私欲が最終の動機だったとしても、彼らは「神」の名による正当化をせざるをえないのだ。人類における宗教一般の功罪を、「それによって命を救われた人」と「それによって命を落とした人」の数の多寡によって計ったとしたら、一体、どちらに軍配があがるのか？ こういう一見してナンセンスな問いを投げかけるのも、反実在論の立場からすれば、宗教は本質的に「趣味の問題」だからである。

ここで「趣味の問題」というのは、この後の章の「美」と「道徳」においても同様に主張される反実在論の基調テーマである。それは、どの宗教を信じようと、どの神を崇拜しようと、この論考で主張される自由至上主義における愚行権の行使として、他者の自由を侵害しない限りは本人の自由だ、という意味である。どれほど残忍な神であろうと、どれほど愚劣極まりない教義であろうと、本人が選ぶのは自由である。本人がどんな不利益を蒙り、何を狂信的に喚こうと構わない。ただ、その信仰者の自由は、絶対に他者の自由、つまり他人の生存の自由、財産の自由、信教の自由、要するに、自由至上

主義において本人と同じく保証されるべき「行為の自由」を侵さない限りでのことである。したがって、家族においていかにその宗教への帰依が自然だという環境で子どもが育とうとも、その子が自律した行為者として自分の自由を行使できる段階では、その宗教への態度を改めて自由に選択できるように機会が与えられなければならない。例えば、神道の家系に生まれた子どもが、成人した段階で無宗教であることも、あるいはイスラム教徒やヒンズー教徒になることも自由に選択できるようになっていなければならない。それが制度的に不可能な場合は、その制度は、第一に平たく言えば人権侵害（他者の自由の侵害）の制度として改められるべきである。この問題は、後で、「マインド・コントロール」の章で再び取り上げるが、ここではまず、以下を確認するだけにしておこう。すなわち、宗教が結局は趣味問題であることを弁えた大人なら、自律した際の子どもに対して、「せいぜい<良い趣味>としてこれを君に勧めているだけだよ」、と宣言すべきなのだ、ということ。

もちろん、宗教を「趣味問題」とすることは、宗教が人類の歴史上果たしてきた巨大な（正負の）役割を軽んずるものではない。それどころか、宗教は、これまでの人類の道すがら、音楽や絵画や建築や小説や詩に多くのモチーフを提供し、人類の文化は宗教的エピソードから多大のインスピレーションを得てきた。洋の東西を問わず、世界のどんな地域でも、宗教を抜きにしてはその文化の特質を語れないほどである。しかし、反実在論は、宗教に結実した人間の幻視と幻覚と妄想の能力には実在性を認めても、宗教そのものには実在性を認めない。宗教は、集団幻想が生み出した虚構にすぎない。例えば、宗教的な主題による音楽がしばしば圧倒的な感動を呼び起こすのは、その宗教が何らかの真実や真理を握っているからではない。逆に、「超越的なもの」を感受せしめた人間由来の古代の音の力を、宗教が遡って利用しているからにすぎないのだ。